

公園にいた少年

紫 李鳥

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

公園のベンチに、野球帽を被った少年が下を向いて座っていた。

目次

公園にいた少年

1

公園にいた少年

美咲は実家から通っていたが、会社まで遠かったので、都内にアパートを借りることにした。

だが、それは建前で、親元から離れ、ひとり暮らしを謳歌したいというのが本音だった。部屋は三階建ての3階なので、エレベーターがないのは不便だが、家賃の安さを考えたら贅沢は言えない。

その代わり、利点もあった。緑豊かな大きな公園が近くにある。散歩にはうってつけだ。

休日は公園の散歩を楽しんだ。

新緑の公園は、草木が青々と茂り、どこからともなく漂うクチナシの甘い香りが心地よかった。

眉間に皺を寄せて苛立つ通勤ラッシュ時と違い、静閑な公園は、行き交う家族連れや

犬を連れた老婆さえも温厚な人柄に感じられ、自ずと自然な笑顔になれた。

森林浴を満喫して、リフレッシュした帰りだった。

公園の出口にあるベンチに、紺色の野球帽を被った少年が下を向いたまま、動かないでジーンと座っていた。

少し不気味だったので、急ぎ足で公園を出た。

それから数日後。

仕事帰り、駅前の商店街で食材を買い、アパートの前まで来た時だった。郵便受けがある一階の階段に、野球帽を被った少年が座っていた。視た途端、ハツとした。

公園にいた少年だった。

……どうしてこんなところにいるの？

あの時と同じように、下を向いたまま、ジーンと座っていた。

少年の横には人一人通れるスペースがあったので、知らんぷりして通り過ぎようとも思ったが、つい、——声をかけてしまった。

「……ね、どうしたの？」

少年の顔を覗き込んだ。少年はゆっくりと顔を上げると、美咲を見た。入り口の照明に照らされたその目は、妙に大人びていて、一瞬ドキツとした。

「……カギをなくしちゃったんだ。母さん、仕事だから、帰るの遅いんだ」

感情のない棒読みのようなしゃべり方だった。

「何時ごろ帰るの？」

「夜の仕事だから、朝」

「えっ！それまでここで待ってるの？」

「うん……」

少年は無表情でうつむいた。

声をかけた以上、放っておくわけにはいかなかった。

「……うちに来る？」

「えっ！いいの？」

少年は瞬時に顔を上げると、嬉しそうな目を向けた。

少年を部屋に入れると、テレビを点けてやった。

夕食の支度をしながら、テレビを覗いている少年の背中をチラッと見た。

一緒に食事をしながら、どこに住んでるのか少年に尋ねると、このアパートの一階だと答えた。

不動産屋の営業時間外なので、連絡は取れない。母親の勤め先の電話番号も知らないと言うので、仕方なく、泊めることにした。

鍵をかけてシャワーを浴びている時だった。

人の気配を感じ、シャワーカーテンから覗いた。だが、ドアは閉まっていた。

浴室から出て居間に行くと、少年はテーブルに腕枕をしていた。

布団を並べて敷くと、少年を寝かせた。

——どのくらい経っただろうか、押さえつけられている感じがして目を覚ますと、顔から首にかけて、びっしょりと汗をかいていた。

手の甲で汗を拭いながら横を見ると、カーテンの隙間から漏れた明かりが、寝ている少年の背中にあった。

ホッとすると、再び眠りに就いた。

翌朝、目を覚ますと、少年の姿はなく、スニーカーもなかった。

帰ったのを確認すると、ドアの鍵をかけた。

汗をかいたのでシャワーを浴びようと、パジャマのボタンに手をやった。すると、パジャマのボタンが2と3個外れていて、ズボンが腰のあたりまで下りていた。

……こんなになるほど寝相は悪くない。よほど暑かったのだろうか。

そんなことを考えながら、洗面所に行つて鏡を視た途端、

「うわあー……何これ」

思わず声を上げた。

目がくぼみ、老婆のように痩せこけていたのだ。

……どうして、こんなことに？何があつたの？

美咲は嘆きながら、肩を落とした。

……こんな顔では会社にも行けない。休もう。

体も怠かつたので、休むことにするとバスタブにお湯を溜めた。

「……イヤだ」

裸になって、更に驚いた。体のあちこちに赤い痕がついていたのだ。

それはまるで、キスマークのようだった。

……まさか、少年の仕業？ そんなはずはない。だってまだ、小学生だもの。それに、もしそんなことがあつたら気づくはずよ。だってたら何？ 蕁麻疹（じんましん）？ 汗疹（あせも）？ それとも湿疹？

美咲は自問自答しながら、悶々とした。

会社に休みの電話を入れると、外出する気にもなれず、部屋に閉じこもった。

栞（しおり）を挟んだ文庫本を開いても活字を追えず、テレビを点けてみても内容が頭に入つて来なかった。

……少年は小学5く6年だった。寝ている女にキスマークなんかつけるはずがない。やっぱり、何か湿疹の類いだろう。

そんな、似たり寄つたりの答えばかりが、頭を行き来していた。

母親に症状を伝えようとも思つたが、余計な心配をかけたら、実家に帰されそうで、結局、電話はしなかった。

自力で、老婆のようなこけた顔とキスマークのような痕を治したくて、また風呂に入った。

湯船の中で、何度も何度も揉んだり、擦つたりした。

風呂から上がると、化粧水や乳液をたっぷりつけ、顔パックもした。

気がつくと、夕方になっていた。

冷蔵庫にある物で料理を作った。

あまり食欲はなかったが、栄養を摂れば、やつれた顔も赤い痕も治ると暗示をかけて、無理矢理に口に入れた。

そして、ぐっすり眠れば元に戻る、と自分に言い聞かせ、早めに就寝した。

何度も目が覚めたが、顔を確認するのが怖くて、また目を閉じた。

翌朝、目を覚ますと、恐る恐る鏡を視た。

「あゝ……」

美咲は思わず安堵の声を漏らした。元に戻っていたのだ。嬉しくて、何度も顔に触れた。そして、体についていた赤い痕もすっかり消えていた。

……悪い夢でも見ていたのだろう。

そんな風に自分を納得させ、心機一転で食事の支度をした。

それから数日後の休日。散歩に行こうとした時、少年が住んでいるという一階の部屋を確認してみようと思った。

だが、一階の5室のどこにも表札はなく、人が住んでいる様子もなかった。

郵便受けも確認したが、一階だけ一つとして表札がなかった、

……どうということ？少年は確かに、このアパートの一階に住んでいると言った。

美咲は釈然としなかった。

……なんか、奇妙だ。

不可解な今回の出来事の真相を知りたかった美咲は、古くからこの辺に住んでいそうな人の家を探した。

少し歩くと、古い家の庭の手入れをしている老婆の姿があった。

「……あのう、すいません」

「はい」

「今度、あのアパートに引っ越して来る予定なんですけど」

そう言いながら、そこから見えるアパートを指差した。

「この辺の住み心地はどうかと思つて。住みやすいですか？」

「ええ。大通りから離れているので静かですよ。……でも」

老婆が言葉を詰まらせた。

「えっ？」

「あのアパートの105号室はやめたほうがいい」

「……どうしてですか？」

「……心中があつたのよ」

「エッ！」

「親子の無理心中が。……あれはもう10年ぐらい前になるかね。水商売をしていた母親が小学生の息子を殺して、自殺したのよ。動機は分からないんだけどね。明るい子で、いつも野球の帽子を被って公園に遊びに行つた。……生きていたら立派な青年になつていたでしょうにね。哀れな話ですよ」

……つまり、あの少年は幽霊だったの？

俄に身の毛が逆立つのを感じた。

実家に戻ることにした美咲は、即刻荷造りを始めた。

引越越し当日、荷物を運び終えると、引越し業者のトラックの助手席に乗った。

その光景を、木の陰から悲しい目で見ている野球帽を被った少年がいた。

少年の口の周りには、ポツポツと髭が伸びていた。――